

○水稲

1) 刈取り（早期水稲）

- ・収穫期を迎えている水稲は、刈取り前、過度に田面を乾かさないように、計画的にかん水を行う。刈取りが遅れないように適期に刈取りを行う。

2) 幼穂形成期～出穂開花期

- ・普通期水稲ではこれから水が最も必要な時期である幼穂形成期～出穂開花期になり、次のような計画的なかん水を行う。

ア) 幼穂形成期（出穂前25～15日）は水に余裕があれば数回、少なくとも1～2回はかん水して田面を乾かさないようにする。

イ) 穂ばらみ期～出穂開花期（出穂前15日～出穂後5日）は特に水を必要とするため、数回かん水して田面の湿潤状態を保つようにする。

○果樹

1) かん水

【温州みかん】

この時期は、果汁が増加する時期である。8～9月の土壤乾燥は、糖含量を高める。しかし、極度の乾燥は、酸高や樹勢低下を招く場合もあるため、葉の巻き具合（昼も夜も萎凋したままで朝になっても元に戻らなくなる）等を見ながら、7日間隔で10～20mm（10～20 t/10 a）程度のかん水を行う。

【中晩生柑橘類】

大玉生産の必要な中晩生柑橘類は、果実肥大促進のために、7～10日間隔で20～30mm（20～30 t/10 a）程度を目安にかん水する。

甘平の裂果軽減には土壤水分の急激な変化を抑えることが重要である。5日間隔で20～30mmのかん水を行う。

【キウイフルーツ】

蒸散量が多く浅根性であるので、他の果樹に比べ、乾燥の影響を受けやすい。乾燥が続くと、葉の萎凋や葉焼けがおき、樹勢が低下し、果実肥大が抑制されるため、土壤の乾燥状態や葉の萎凋などの生育状況を観察しながら、5～7日間隔で20～30mm（20～30 t/10 a）程度かん水する。また、敷わら、敷草を行い、土壤表面からの蒸散を防止する。

2) 苗木、高接ぎ樹の管理

苗木や幼木、高接ぎ樹は乾燥に弱いため、土壤が乾燥しないように十分にかん水する。その後、蒸発防止のため稲わらやビニールマルチなどを被覆する。

3) ハウス管理

サイド、谷、つま部はできるだけ開放するとともに、遮光ネットを被覆するなどして施設内の高温を防ぐ。また、樹の状態に応じてかん水を行い樹勢の維持を図る。

4) マルチ被覆

シートを被覆する時に土壌が過乾燥となっている場合は、10mm(10t/10a)程度のかん水を行ってから被覆する。

5) 敷わら・敷草

敷わら・敷草等を行うと、裸地に比べて土壌水分保持効果が高い。また、高温時には地温上昇防止効果もある。

○野菜

1) 夏秋野菜

生育状況に応じ、適期適量かん水を行う。なお、水の有効利用を図るため、日没後又は早朝に集中的に行う。

2) 病虫害防除

高温乾燥状態では、アブラムシ類、ハダニ類、スリップス類などの害虫の発生が多くなるので、防除の徹底に努める。

3) 秋まき野菜

秋まき野菜は、用水が確保できる場合、適期播種に努める。用水が確保できない場合は、降雨を待ってから播種する。

○花き

(1) 生育中の花き類

高温・少雨が続くと植物体は萎凋し、養分の吸収や同化作用も抑制され、生長が抑えられる。一方、呼吸作用は盛んになるため、貯蔵養分の消耗は増大し、草丈は低く、葉は小さく、葉色は薄くなるなど、品質が低下するので次の点に注意する。

①かん水

水の有効利用を図るため、日没後または早朝に畝間が湿る程度にかん水するか株元に集中的に行う。

②遮光

植物体からの水分蒸散防止、温度上昇防止のため、寒冷紗等で遮光する。

③病虫害防除

乾燥すると害虫の発生が多くなる。特にアブラムシ類、ハダニ類、スリップス類などの害虫の発生が多くなるので、防除に努める。

◎病虫害の防除については、各防除指針に準ずる。

(愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課資料・参照)